

ゼミナール選択のメカニズムを解き明かす

—5つの学生タイプ、4つのゼミ選択視点—

大学生の学びにおいて、大きなウェイトを占めるゼミナールという存在。その選択のプロセスは、就職活動に酷似している。彼ら彼女らは、どのような視点でゼミナールを選択しているのか。その選択視点によって、ゼミで得られるものはどう変わるのか。9大学の教員16名、学生36名へのインタビューから解き明かしていく。

豊田 義博

5人のペルソナ

5人の大学生の紹介から始めたい。いずれも2年生。大学という環境に十分に慣れ、ある程度ライフスタイルが確立している、そんなコンディションの学生たちだ。

1人目はA君。初年次から学び、サークル活動、アルバイトすべてに積極的で、極めて充実したキャンパスライフを送っている。2年次に受講した選択科目のテーマに深く興味を持ち、教員と頻繁に対話している。

2人目はBさん。入学時から積極的に学ぶ姿勢を見せ、授業も前の方で受けている。でも、学びにさして熱心でない多くの同級生たちとは価値観が合わない。サークル、アルバイトなどの活動もしていて、何か打ち込めるものを探しているような状況だ。

3人目はCさん。大学には毎日来ているが、興味も持てる授業はなく、学びには後ろ向き。サークルも興味を惹かれるものがなく、入っていない。同級生たちとの交流の時間はそれなりに楽しいのだが、「このままでいいのかなあ」と、心の中はくすぶっている。

4人目はD君。大学には通っているものの、もともと

図表① 5人のペルソナ

	Type A	Type B	Type C	Type D	Type E
学習意欲	◎	○	▲	×	×
不安感	×	▲	○	×	?
満足度	◎	○	▲	◎	×

と勉強は好きではないので学びは手抜き。単位は何とか取得しているがGPA^{*1}は低レベル。サークル活動が生活の中心。サークル仲間と一緒に時間がこよなく楽しい。

5人目はE君。とにかく目立たない。初年次教育や語学のクラスでも存在感が薄い。学びも大学に行くこと自体も受け身で、単位はぎりぎり、授業も休みがち。大学では“ぼっち”。高校の友達と時々会っているようだ。

彼らの学習意欲の違いは、この情報だけでも十分にわかるだろう。A君の学習意欲は極めて高く、Bさんも学ぶ意欲はある。Cさんの学習意欲は高まってはいる。そして、D君、E君には、学ぼうとする姿勢そのものが見られない。

自身の今の状況に対する不安感という側面で見ると、異なる傾向が浮かび上がる。A君には不安感はほとんどない。Bさんには少しはあるものの、前向きに行動できている。Cさんにはそれなりの不安がある。今の自分のままではいけないのではないか、という自覚がある。一転してD君には、不安などない。そしてE君の心の中には、不安を感じるセンサーが見当たらない。

さらに、満足度という観点で見ると、A君とD君は極めて高く、Bさんはやや高め、Cさんはいま一つであり、E君の満足度はかなり低い、という状況だ。

この5人のペルソナは、どのキャンパスでも見かけることができる。そして、大学生は、大きくこの5つにタイプ分けすることができる。どのような比率で分布しているかという測定データは残念ながらないが、その分布はイノベーター理論^{*2}の5分類に近似しているようだ。

新製品・サービスが市場に流通する前から目をつけ、いち早く購入・利用するイノベーターに該当するのがA君のような学生＝Type A。その比率は数%程度の超少数派だ。

そして、イノベーターに次いで初期から新製品・サービスを活用するアーリーアダプターに対応するのがBさんのような学生＝Type B。こちらも少数派だ。

続いて、ある程度の情報は持っているながらも新製品・サービスの利用には慎重なアーリーマジョリティに当たるのがCさんのような学生＝Type C。多数派だ。

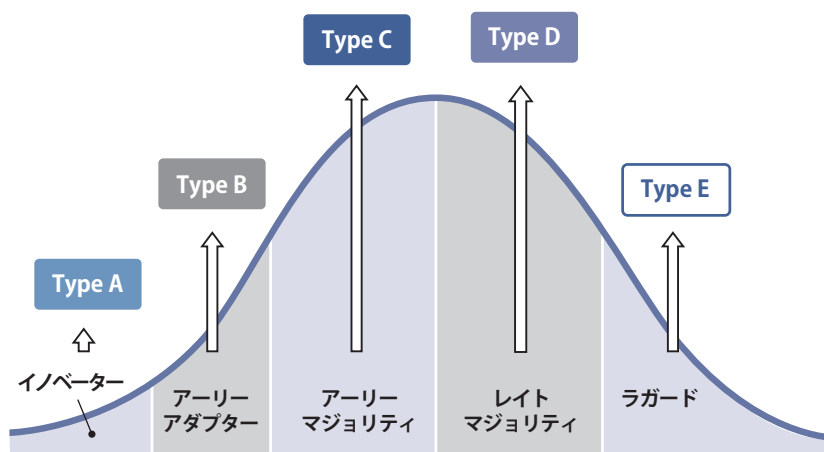
新製品・サービスについては消極的で、なかなか利用しないレイトマジョリティに当てはまるのがD君のような学生＝Type D。こちらも多数派である。

最も保守的で、新製品・サービスが一般化するま

*1 Grade Point Average。各科目の成績から特定の方式によって算出された学生の成績評価値。0から4の間に分布する計算式が主流であり、一定以上の点数を取ることが卒業要件となっている大学もある。

*2 1962年に米スタンフォード大学のエベレット・M・ロジャーズ教授が『イノベーション普及学』という著書の中で提唱した理論。

図表② イノベーター理論との符合



で利用しないラグード (laggard = のろま) が E 君のような学生 = Type E。この比率はさほど高くはない。

この分散、存在比率は、程度の差こそあれ、どの大学でも見られる傾向のようだ。入学偏差値の高い大学であれば Type A、Type B ばかりで、入学偏差値が低く、定員割れしているような大学だと Type D、Type E しかいない、というような状況では決していない。

さて、このような、学びへの向き合い方が異なる5つのタイプだが、大学2年生時点でのタイプのまま卒業するののかといえば決してそうではない。Type E だった学生が、卒業時には Type A になっていた、というような事例を聞くことは珍しくない。そうした変容のきっかけは様々だが、明らかに大きく影響していると思われるのが、専門ゼミナール(以下、ゼミ)という存在だ。

実践コミュニティ「ゼミナール研究会」

「20代が生き生きと働ける次世代社会の創造」。リクルートワークス研究所のミッションステートメントの冒頭のフレーズ「一人ひとり」を「20代」と置き換えたものだが、これが筆者のミッションステートメントである。次世代とは、つまるところ現在の若手人材が社会の中核となる時代。若手人材が生き生きとしているかどうかで未来を制する。

現代社会においては、20代のスタートを大学生というステータスで迎える人が主流だ。ストレートで大学に進学すれば、大学2年生の時に20歳を迎える。そして、大学生の中でも標準的である人文・社会学系などのいわゆる文系学生の大半は、大学後期から始まるゼミ選びのまっただ中にある。彼らは、20代の到来とともに大学生活の重要な選択機会を迎える。

ゼミに入って学びと向き合う姿勢を大きく変えたという学生は少なくない。2年程度の長期にわたって、1人の教員のもとで、少人数の学生が共に学ぶ、とい

う場を通して、飛躍的に成長していくというケースを探すのは何の苦もないことだ。

ゼミでの学習・経験が彼らにそのような大きな変容 = 成長をもたらしている。学習テーマや学習スタイルのデザイン、チームコンディション作り、個々の学生に合わせた適切な指導などの、教員の様々な教育行動が、学生の成長を生み出している*3。

だが、同じゼミにいても成長する学生とそうではない学生がいることもまた事実だ。成長の要因は、教員サイドの施策だけではない。ゼミに臨むマインドセットや期待値という学生サイドのファクターも大きいのではないかと考えられる。

そこで着眼したのが、ゼミ選択だ。選択のありようが、ゼミでの学生の成長に大きな影響を及ぼしているのではないか。ゼミ選択が、自身が成長できるコミュニティを選ぶ初期キャリアにおいて重要な転機をもたらしているのではないだろうか。

ゼミ選択は、就職活動に酷似している。数多くのゼミの中から学生が希望するゼミを選ぶわけだが、そこに至るまでには、ゼミ選びに関するオリエンテーション、個別ゼミの合同説明会、模擬授業見学など様々な参加機会があり、また、先輩ゼミ生からゼミの実態を聞く機会を自身で作り出すなど、主体的な情報探索活動を行う学生も多い。

また、就職における企業選択と同様に、誰にとっても望ましいゼミが存在するのではない。学生個々人のニーズやコンディションにふさわしいゼミが存在していて、ふさわしい場の選択ができた学生は、そこで大きな成長を獲得することができる。

2019年に発足した実践コミュニティ「ゼミナール研究会」は、こうした視界、問題意識のもとに初年度の活動をスタートさせた。首都圏にある9の私立大学の文系学部*4を対象に、教員総計16名にインタビューを行い、各学部でのゼミ運営状況、学生のゼミ選択に向けての施策について探索した。併せて学生総計36名へのインタビューを行い、自身並びに同級

生のゼミ選択における意識・行動、重視した視点について探索した。

4つのゼミ選択視点

学生の選択視点は4つに集約された。ただし、それぞれの内容は多義的である。順番に説明していきたい。

ゼミ選択の1つ目の視点は「外形視点」だ。ゼミが持っている外形的な要因や、自身のゼミ選びの基本スタンスによって構成されている。興味・関心の持てる「学問分野／テーマ」か、学生間の「評判・人気」はどうか、ゼミの「サイズ(学生の数)」はどのぐらいか、そして、学生自身の大学生活でのゼミの「優先順位」は高いのか。ほぼ全員が考慮する前提のような視点とっていいだろう。

2つ目の視点は「経験視点」だ。そのゼミナールに所属すると、どのような学習・経験ができるのか、というゼミ選びの根幹部分である。座学ではなく、企業や地域との協働やフィールドワーク、学外コンテストへの参加のような他流試合、つまり「社会実習」を期待する声は高い。ゼミ内での「発信・対話機会」が多く得られるかを気にする声もよく聞かれた。また、活動を通して形にする「アウトプットの品質」を問われるか、授業時間以外の時間を含めた「関与時間」が

どの程度か、という観点もよく聞かれた。学習意欲が高く、ゼミの「優先順位」が高ければ、経験視点は必然的に重視されることになる。

3つ目の視点は「環境視点」だ。ゼミは、学習の場であると同時に、長きにわたって時間を共にするコミュニティでもある。そのコミュニティが自身にとって快適かどうかを重視する声が多く聞かれた。その筆頭は、ゼミ生同士が「気心の知れた仲」であるかどうか。仲良しが集うのであれば、一緒にいる時間も快適になる。その延長上に、遊びを含めた生活全体の「居場所」となることを期待するという声もある。ゼミ生同士が「高めあう関係」になれるかどうかを気にする声も聞かれた。この声の裏には、それまでのキャンパスライフにおいて、そのような刺激しあえるメンバーとの出会いがない、という渴望感がある。また、「教員の個別関与」を期待するという声も数多く聞かれた。教員は「経験視点」に強く影響を与えるが、その視点とは別に、コミュニティの主宰である教員に、学びに閉じない様々な相談に乗ってもらいたい、という声だ。

4つ目の視点は「展望視点」だ。ゼミを通して自身

*3 『あのゼミではなぜ学生が育つのか—教員たちの教育行動に注目して』 Works Report 2019 リクルートワークス研究所 https://www.works-i.com/research/works-report/item/190327_seminar.pdf

*4 経営系、経済系、社会学系、教育系学部、入試偏差値60台後半から30台後半まで幅広く対象を選択した。

図表③ 4つのゼミ選択視点

<p>ゼミ選択の視点① 外形視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身が望む「学問分野／テーマ」の学習ができる ・学生間の「評判・人気」を気にする ・ゼミの「サイズ(学生の数)」を気にする ・自身の大学生活の中でのゼミの「優先順位」が高い 	<p>ゼミ選択の視点② 経験視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「社会実習(企業・地域協働/フィールドワーク/他流試合)」を期待する ・ゼミ内での「発信・対話機会」が多い ・「アウトプットの品質」を追求する ・「関与時間」が長いことを辞さない
<p>ゼミ選択の視点③ 環境視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミ生同士が「気心の知れた仲」であることを期待する ・遊びを含めた生活全体の「居場所」となることを期待する ・ゼミ生同士が「高めあう関係」となることを期待する ・「教員の個別関与」を期待する 	<p>ゼミ選択の視点④ 展望視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「持ち味の確立」を期待する ・「弱点の克服」を期待する ・「大学生活のシンボル」となる経験を期待する ・「就職活動での活用」を期待する

がどうなりたいか、何を得たいか、という展望を描いている学生が多く見られた。ゼミでの活動を通して、自身の強み、武器となる「持ち味の確立」を成し遂げたい、という声。自身が持っている「弱点の克服」を成し遂げたい、という声。そして、これが大学生活の集大成だ、といえるような「大学生活のシンボル」となる経験を得たい、という声。大学生活の終盤に待ち構える「就職活動での活用」を期待する声もちろんある。ガクチカ＝学生時代に力を入れたことのネタとして使いたいという狙いだ。

5つのタイプとゼミ選択視点の関係

しかし、こうした選択視点を全員が同じように持っているわけではない。どの視点を重視するかは、学生によって大きく異なる。冒頭に提示した5つのタイプごとに、その違いを見ていこう。

学習意欲が高く、ゼミ選択以前から関心のある学習テーマを持っているType Aのゼミ選択はシンプルだ。外形視点の「学問分野／テーマ」が最大の決め手になる。A君も「8割は、学問分野で決めました」とコメントしている。ゼミ運営においては「ゼミの主体は学生かどうか」も確認したという(経験視点「発信・対話機会」)。しかし、ゼミの「優先順位」が高いというわけではない。他の活動を積極的にしていることもあり、ゼミ活動に膨大な時間を取られることは避けたい、だから、経験視点「関与時間」についても確認する。

自身を高めたい、という意欲をそれなりに持っているType Bは、ゼミという存在に大きな期待感を持っている。必然的に、多くの選択視点に想いを馳せる。外形視点「優先順位」が高いから、「経験視点」を重視する。「社会実習」で実践的な学びを期待し、自分の力を試したいと「アウトプットの品質」にこだわり、長い「関与時間」も辞さない。さらに環境視点「高めあう関係」を大切にし、展望視点「持ち味の確

立」を成し遂げたいと思っている。

Bさんのインタビューで印象的だったのは、「このゼミなら、みんな真剣に勉強していて、本気で勉強できる環境だなんて」という発言だ。1、2年次の不完全燃焼感を、ゼミにぶつけたいという熱意が伝わってくるものだった。「3年生とか4年生に圧倒されました。キラキラしている方ばかりだったので」というコメントも印象的だった。先輩の存在は、特にこのタイプには大きく影響するようだ。

Type Cは、ゼミ選びにおいても逡巡する。これまでの大学生活の延長のままでいいのか、それとも何かを変えなくてはいけないのか。選択視点も揺れる。Cさんもそうだった。これまでと同じように、仲のいい友達と楽しくやっていく、という道も考えた。しかし、「大学にせっかく入ったのに、『これです』っていうのがない」という反省を踏まえて、ゼミ活動を「大学生活のシンボル」にしようという展望を持ち、卒論も頑張ろう、と決意した(経験視点「アウトプットの品質」)。

同じType Cである別の学生は、「人前で、ちゃんと自分が思っていることを話せるようになりたい(展望視点「弱点の克服」)から、「発表をたくさんさせられるゼミ(経験視点「発信・対話機会」)をあえて選んだという。

しかし、自分一人の力だけでは心許ない。自分を受け入れてくれる「居場所」を期待する。ゼミの雰囲気、誰がそのゼミに進むのか、など「環境視点」をとっても気にする。中でも大きいのが教員への期待だ。Cさんは、「いろんな相談に乗ってほしいから、人数の多いところは嫌でした(環境視点「教員の個別関与」、外形視点「サイズ」)と発言している。

教員が自身の力になってくれるかどうかをとっても重要に思っている学生は想像以上に多かった。印象的だったある学生のコメントを紹介したい。

「2つのゼミで迷ってしまいました。ゼミ説明会の時に、担当の先生の様子を見ていたんです。◎◎先生は、

●●先生の説明を熱心に聞いていて、何度もうなずいていました。でも、●●先生は、◎◎先生の発表の時にスマホを見てました(笑)」

この学生がどちらのゼミを選んだか、書くまでもないだろう。

Type Dの学生は、ゼミ選びにおいても意欲が低いままだ。真面目に学ぶつもりなどない。とにかく卒業できればいいと考えているので、「楽勝」ゼミを見つけようとサークルの先輩に熱心に聞き込んだりする(外形視点「評判・人気」)。D君のインタビューでも「とにかく緩いところ」「課題が重くなくて単位が取りやすい」という端的なコメントが聞かれた。

また、活動が長期になることから、仲のいい友人たちと一緒にいたい(環境視点「気心の知れた仲」と願う気持ちも強い。D君は、「友達同士で『このゼミにみんなで入ろうよ』と仲間に働きかけたという。このように、Type DはType D同士で「つるんでいる」ケースが多い。しかし、実はその集団の中にType Cも多く存在し、Type Dからの同調圧力を受けている。Type Cが揺れるのは、そうしたつながりにも起因する。

Type Eには意思がない。正確には、意思を持つ

ことをあきらめている。能力の問題ではなく、姿勢の問題だ。大学に通っていること自体も自主的でないので、ゼミ選びにも意思はない。E君は、選べなかったという。「学びたいことですか、いや、特に」。そして、ゼミ選択のための志望書の提出期限を忘れ、「大学から連絡が来ました」。

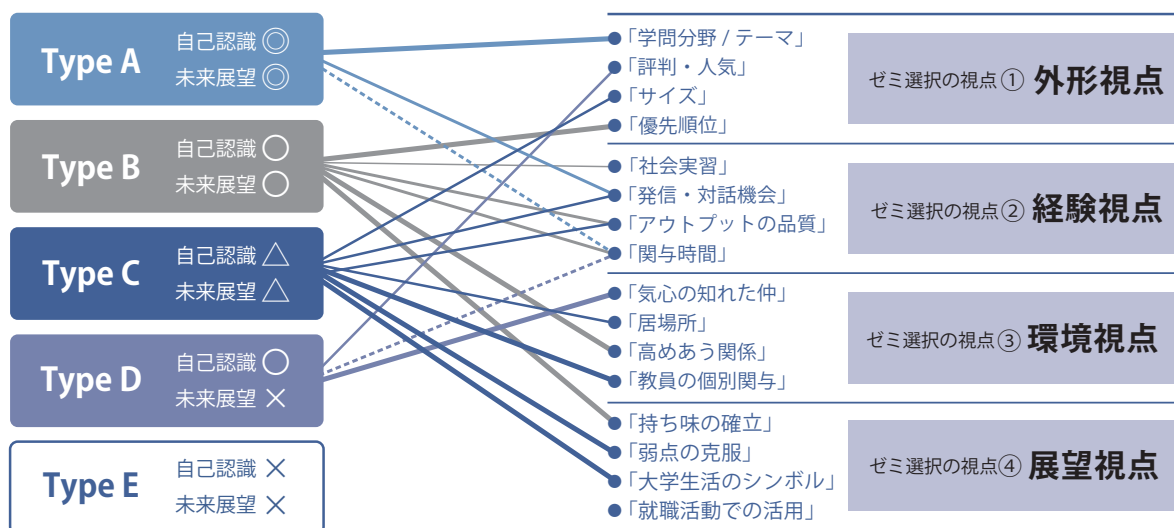
起点としての「自己認識」と「未来展望」

Type A～Eと選択視点との関係を、各タイプの「自己認識」と「未来展望」レベル、という観点を加えて整理していこう。

Type Aの自己認識レベルは高い。自分のことがよくわかっているし、現状を積極的に肯定している。そして、未来展望も描けている。今の努力の延長線上にありたい姿がある。だから、積極的に活動できる。つまり、ゼミ選択以前に、自身の展望が描けている。だから、ゼミ選択視点は、シンプルになる。

Type Bの自己認識レベルもまずまずだ。自分のことが何となくわかっている。そして、もっと自身を高めたいと考え、現状を積極的に否定している。未来展望もおぼろげながらに見えている。そして、ありがたい

図表④ 5タイプとゼミ選択視点の関係



姿に向けて自分をもっと高めていきたいと考えている。ゼミという存在を自己成長の大きなチャンスととらえている。だから、展望を持ち、そして、自身が成長できる環境にも想いを致す。

Type Cの自己認識レベルはあまり高くない。自分のことがよくわかっていない。ただし、今のままでいいとは思っていない。現状を消極的に否定している。だが、未来展望は不確かだ。何をすればいいかわからない。だから、大きく揺れる。他者の影響を強く受ける。そして、不確かながらも、自身が取り組むべき課題を特定できるかどうか、展望視点を持てるかどうかで、このタイプのゼミ選択は大きく変わる。そして、「弱点の克服」「大学生活のシンボル」といった展望視点が形成されると、その達成に必要な環境視点が形成されていく。

Type Dは、自分では自己認識できていると思いつ込んでいる。自分は「まあこんなもの」と現状を消極的に肯定している。しかし、自身の課題や成長可能性を自覚できていない。そして、自分が見えていていると思っていながら、実は見えていないから、未来展望を持ってない。そのままでもいい、その日その日が楽しければそれでいいと思っている。だから、ゼミ選択は安易なものになる。現状を継続したいがために環境視点は重視するが、積極的な視点はそれ以外には形成されない。

Type Eは自己認識ができていない。言われるがまま、周りに合わせるばかりで自己がない。必然的に未来展望はない。考えていないし、考えたくもない。そのような状況では、ゼミ選択視点は明確には形成されない。

適応・成長をもたらす 「環境視点」×「展望視点」

36人の大学生へのインタビューから見えてきた4つのゼミ選択視点。学生のタイプにより、重視する

視点には違いがあった。望ましいパターン、望ましくないパターンも見えてきた。

最後に、改めて、ゼミ選択のゴールは何かを考察し、ゼミ選択のあるべき方向性を論じたい。

ゼミ選択の第1のゴールは「選択したゼミへの適応」だろう。長期にわたって学ぶ重要な場において、自分らしく、ありたい状態であることができることは極めて重要な前提条件だ。

となれば、「環境視点」は、ゼミ選択の必要条件といえるのではないだろうか。自分自身がどのような環境に身を置けば、自分らしく、ありたい状態でいられるか。この視点に想いを致すことが肝要である。

ゼミ選択の第2のゴールは「選択したゼミでの成長」だろう。ゼミでの学習・経験機会を通じて、自身を高め、変容していくことは、学生本人にとって望ましいのはもちろんのこと、大学にとっても質保証の大きなポイントである。

となれば、「展望視点」が、ゼミ選択の十分条件だといえるのではないか。自身がどうありたいか、なりたいか、という展望があるからこそ、人は主体的に学ぼうとする。展望があつて初めて、人は成長する。

今回のインタビューにおいても、「環境視点」「展望視点」の両方を重視している学生ほど、ゼミで大きな学びを獲得していた。Type Bはその典型であり、Type Cにおいても「展望視点」を持つことができた人は「展望視点」にも想いが至り、そして成長を遂げている。その学生は、現時点ではType AないしはType Bへと変容している。

Type Dは「環境視点」を重視しているが、「展望視点」が大きく欠落している。居心地はいいが何の成長も得られないというストーリーが展開されている。しかし、Type Dも変容する。ゼミ選択時、大学2年生時点ではType Dであった学生が、ゼミ選択プロセスでの情報探索と内省を通じて「展望視点」を確立し、タイプ変容していくケースもあった。

Type Aの学生は、ゼミ選択以前に展望を持って

いる。そして、「環境視点」にはさしてこだわらずにゼミを選択する。だが、ゼミでの学びがスタートし、活動の中で「高めあ関係」が得られることで学びの質が高まり、改めて「環境視点」の大切さに気づくというケースが見られた。また、インタビューにおいてはサンプルが得られなかったが、Type Aと思しき学生が、ゼミ活動をしていく中で意欲を落とし、ドロップアウトしていくケースを何人かの教員から聞くことができた。学習テーマや学習・経験機会がフィットしていても、環境がフィットしないことで離脱していったのではないかと考えられる。

対話を通じた 「自己認識」と「未来展望」の醸成を

これまで、各大学、各教員は、学生に対して様々な情報を提供し、学生のゼミ選択を支援している。自身にふさわしいゼミを選択している学生も多い。だが、安易な選択やミスマッチはまだたくさんある。ゼミ選択時に、学生に「環境視点」「展望視点」を形成させるための仕掛け作りを考えたい。

起点となるのは、学生自身の「自己認識」を高めることだ。自己認識なくして、未来展望は確立しない。ルーブリックなどのツールはその機会につながるだろうが、有効なのは対話の機会だろう。他者が介在することにより、自己認識は深まる。初年次ゼミ、基礎ゼミなどの、専門ゼミに至るまでの少人数教育の機会に、学生と教員が個別対話を重ねる、低学年時からキャリアセンターのキャリアカウンセラーとの対話の機会を創出するといった1 on 1ミーティング、これまでの大学生活を振り返るようなワークショップの実施などの施策が考えられる。これを、希望者にとどまらず、いかに広く展開できるか。Type D、Eの学生を放置してはいけない。

改革すべきなのは、ゼミ選択だけではない。ゼミでの学びそのものの質を高めることこそが肝要だ。キャ

ンパスに数あるゼミの中には、学生の成長を期待できないものも少なからず存在している。しかし、現在のゼミは、あまりにも多くのものを背負わされているように思える。専門分野での学びを深める、という中核だけではなく、就職指導、基礎力養成を期待するのはもちろん、履修指導や生活指導、連絡徹底、退学防止までを期待されているゼミも少なくない。ゼミのクオリティ向上と、学生の自己認識、未来展望の促進を図り、ゼミ選択時に「環境視点」「展望視点」の確立を促進することとは、両輪で進めていく必要があるだろう。

新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、キャンパスの状況は様変わりしている。オンラインでのインタラクション、オンデマンドでの配信など、学習環境、コンテンツ提供メソッド改革の試行錯誤が続く。しかし、学びの本質は変わらない。そして、こうした環境下において、学生が学びに向き合う姿勢には変化の兆しがある。期せずして生まれたアイドルタイムにより自己との対話が進んでいることもあるだろう。コミュニケーションへの渴望感からくるものもあるだろう。大学で学ぶということ自体を改めて見つめなおしている学生も間違いなく存在する。多くの学生が自分を見つめなおす時間を持っている今は、新たな施策を投じる大きなチャンスでもある。

Yoshihiro Toyoda: リクルートワークス研究所 特任研究員

若手からシニアに至るキャリア支援に研究者&実践者として携わるパラレルワーカー。ライフシフト・ジャパン株式会社 取締役CRO。産学協働人材育成コンソーシアム 理事。著書に『実践! 50歳からのライフシフト術』(共著/NHK出版)、『なぜ若手社員は「指示待ち」を選ぶのか?』(PHPビジネス新書)、『若手社員が育たない。』『就活エリートの迷走』(ともにちくま新書)、『新卒無業。』(共著/東洋経済新報社)などがある。